「井戸」　千葉省三
【教材解釈Ⅰ　「書き込み」】

芦原の小学校は、丘の上にあったから、井戸がずいぶん深かった。　重要な意味をもつ

・この物語の展開の核になる「井戸」の説明から書き出す。「ずいぶん深かった。」という一言がこれから引き起こす事件の伏線になっている。

普通の井戸に比べて。この深さが

18m近く　　そのあたりの者が。

水の面まで、十間ちかくあると云った。

・イメージとしては、豊小の校舎の屋上から下までぐらいか。

・井戸の水を汲むときはいつも。それほど気を引く。

ふたがないので、お掃除の水を汲むたんびに、だれでもちょっとのぞいてみたくなる。恐いものみたさ。好奇心。

・ちょっとのぞいて見た。

望遠鏡を逆さにのぞく　　途中から消えてまるで底なしの穴と見える。

大きな遠目鏡でものぞくように、赤土の壁が、丸い筒になって、うす暗い地の底に消えこんでいた。

・上から見ていると、その暗黒の暗闇の中に吸い込まれそうな不気味さをもっている。

・そして、はるか下の方に、小さい、円い、お盆のような水が、つめたく光って見えていた。

不気味なつめたさ。

→「おてんとさまのように円い、明るい空」との対比。

＊この段落で、「井戸」の不気味なイメージを十分作っておかないと、後が読めない。

逃れられない。

丑は、三日目ごとにまわってくる、掃除当番がいやでいやでしようがなかった。

・強調

そのたんびに、水汲みをさせられるからだ。

・水汲みをさせられることがなぜ、そんなにいやでいやでたまらないのか。

1仕事のえらさ。「五はい六ぱいとなると、息がきれて、腕がしびれて、」

2そのたびにみじめな思いをさせられる。（馬鹿にされる。）

3押し付けられた仕事ゆえ。みんなで分担しあったものではない。

丑は、力が強いかわりに、不器用な子どもだった。

・下手なだけで、怠け者ではない。一生懸命やってもうまくできない。

丑のふいた廊下は、しまになって、ちっともきれいに光らないし、丑の並べた机や椅子はふしぎなほど、きっとゆがんでいた。

・あんなに一生懸命やっているのに、不思議なほど、

丑のやったお掃除のあとは、見まわりにきた先生に、いつもやり直しをさせられた。

・一方的に。

それで、ほかの当番がいやがって、とうとう丑を水汲み専門の役目にしてしまったのだ。

・不器用な丑のせいでそうじのやり直しをさせられるという不満からそうなった。これは、やむを得ないことのように見える。だが、ここには、丑に対する思いやりは全くない。むしろ、自分たちのいやな仕事をうまく合理化して、丑に押し付けたのである。丑への相談などなく一方的に。

はじめの二三ばいは、いせいよく、車井戸のつるべをくりおろして行くが、五はい六ぱいとなると、息がきれて、腕がしびれて、一つ汲むのに、幾度も中休みしなければならなかった。

・何しろ18mもの深さがあるのだから。

・中休みとはいえ、力はぬけない

・息をするのが苦しい

いきおいよく。元気に。

「丑、なんしてんだ。井戸んなかさ、鼻汁たらすんじゃねえぞ。」

・この言葉の中には、丑に対する同情のかけらもない。対等な者として見ていない。

丑への心遣いなどない。まともに相手していない

こんなことをいいいい、ほかの当番は、からのバケツを放りだして、丑の汲んだバケツを運んで行った。

・放りだす……乱暴に投げ出す。「ぼくはかんしゃくを起こして本を外へ放り出した。」

丑は、たれかかった鼻汁を袖口でひっこすって、フウとためいきをついて、さもたいぎそうに、またガラガラとつるべをくりおろすのだった。

・ためいき……心配したり、困ったりした時にでる大きな息。

・大儀……くたびれていたり、時間がかかりそうなようす。「あまり暑いのでなにかするのがめんどうだったりして、するのがたいぎだ。」

この時の丑には、対等に扱われていないことに対する怒りはない。されるがままになっている自分を悲しく思いつつ、しかたのないことだとあきらめている。その不当性にまだ気が付いていない。自分で自分を見切っている。

＊この段落で、丑に対するみんなの目、それに対する丑のありよう、まだ、自立していない、丑の姿を明確に読み取らせる。

長い梅雨が、そろそろ晴れかかって、学校の裏の松林では、かえりたてのあぶらぜみがなきはじめた。そのころのある日、だれかが井戸のなかに、何か落っこってるといいだした。

「しゃっぽみてえだな。」

「おら、木の根っこだと思うな。」

「猫っ子かもしんね。」

・冗談から出たものかもしれないが、これをきっかけに問題が大きくなっていく。

「猫っ子よりゃおっきいから、犬だんべ。」

よく、眼をこらしてのぞいて見ると、なるほど、すみっこの、赤土の壁のきわに、なにかうすぐろいかたまりが浮いている。

・翌見えないだけに、そのうすぐろいかたまりは、不気味なイメージを漂わせて見える。まして、もともと気味の悪い井戸の中だから。

「この水ぁ、はあ飲めねえぞ。」

「おら、知んねで、けさものんだんだ。きびわりいなあ。」

・なんとかしようという気はない。ただの野次馬。

みんな井戸のまわりにたかって、ガヤガヤやっていた。

そこへ、先生が出てきた。

先生も、のぞいて見たが、何だかはっきりわからないらしかった。

子どもとちがい、教師には責任がある。近くには井戸がないし、悪いものだったら、少しも早くだしてしまわなければならなかった。

先生は、しばらくのぞいてから、まわりに集まっている生徒の方をふりむいて、

取る方法を考えていた。

・生徒への押し付け。自分はいやだから。

「だれか、はいって見るもんはないか。」

といった。

みんな、顔を見合わせてだまっていた。

・思ってもいないことを突然言い出されて、驚き、当惑している。

・先生と視線を合わせたり、声を出したりしたら自分が当てられるかもしれない。

「そんなこと、だれができるかよなあ。」と互いに目と目で語り合っている。

・じっとだまっていれば、おさまるだろう。難を避ける意識。

「つるべさ、しっかりつかまって行けば、あぶないことはない。そろそろおろしてやっかんな。」

先生は、また、そう相談するようにいって、みんなを見まわした。

・一回す……「回す」があちこち寄り道しながら進む意を持つことから、ただの循環・巡回行為ではなく、「必要以上に行う」「ふつうの調子以上に盛んにあれこれ行う」「しつこい程いろいろと行う」強めの意をそえるようになる。

・つまり、先生は本気でだれかを指名しようとしているのだ。

すると、ひとりが、

「先生！丑がいいや！」

とさけんだ。

・生徒たちは追い詰められていた。このままでは、だれかが井戸の中に入らされる。その時、丑が浮かび上がってきたのである。みんなの仲間集団からはずれている丑なら、誰も文句は言わない。自分たちに向けられた先生の目を丑の方へふりむけるために、必死になって叫ぶ。

「そだ、丑がいい。」

とまたひとりいった。

「丑あ、こないだ、家の井戸ざらいっときも、中さはいったんだもん。」

・本心からそう言っているのではない。自分たちの利己的で、不合理な言い分を正当化させるためのものである。

丑は、みんなのうしろの方に立っていたが、背が高いので、青鼻汁をたらした、まのびた顔だけが、みんなの上に出ていた。

先生の眼が、丑の顔へ向くと、丑はあわてて横をむいて、

「おら、やだよ！」

とつぶやいた。

・全く疎外されている状況の中では、つぶやくよりしかたがなかった。丑の叫びを受け止めてくれる者など一人もいなかったからである。

けれど、だれにも聞こえなかった。先生にも、むろん聞こえなかった。

「そんじゃ、丑松に、ひとつ勇気をだして、はいってもらうとするかな。」

先生としても、ただ、丑の名があがったということだけで、丑に決定するのはいか

にも後ろめたい。井戸さらいにはいったことがある、という言葉に先生ものっかったわけである。

先生は、うす笑いをしながら、ジッと丑を見つめていった。

・うす笑い……声を出さずにかすかに笑う。人を馬鹿にしたような感じを与える。

・じっと……一点に集中する状態を強調する。

先生にとっては、だれでも良かった。だが、「よりによってあの丑が」という思いがここにはある。この大仕事をやってのけるべき立役者にしては、あまりににつかわしくない丑の姿に対する軽蔑の笑い。

「ホラ、お前がへえんだと。したくしろよ、丑！」

「はやく、先生っとこさいげよ。」

まわりにいた子どもは、ぐずぐずしている丑をつかまえて、早く厄のがれしたい。

丑は、何かいいたげに、口を動かしていたが、とうとう何も云わなかった。むりやり前へおし出した。

・自分の意思とは関わりなく、すでに自分の外側で決定されてしまっている。もうおそいのだ。「いやだ」と叫んだところでなにもかわりはしない。もはや、あきらめてその決定に従うしかなかった。

先生は、丑の着物をぬがせて、運動シャツ一枚にした。ほかの子も、帯をしめてやったり、ボタンをとめてやったりした。

・自分が入れられるかも知れないという緊張、恐怖感から解放されて、心が軽くなっている。そして、これからのできごとを楽しむ気分になっている。丑への気遣いからしてやっているのではない。

先生がポケットから鼻紙を出して、丑に、

「鼻汁をかめ！」

・丑のことより、井戸を汚すことを心配している。

と渡したので、みんなクスクス笑った。

・くすくす……声を殺してひそかに笑うようす。「女の子が二人、顔を見合わせてくすくす忍び笑いをしている。」

・もうみんな緊張から解放されて、丑の間抜けぶりを見て楽しんでいる。

つるべのなわに、太い麻なわがもう一本むすびつけられた。先生のさしずで、大きい子どもたちは、一列になってそれにつかまった。先生に助けられて、つるべにまもなく、丑は、寒そうな顔をして、井戸側に上ってたがった。

・これから先のできごとへの恐れ、そして、周囲の冷たい目。疎外された孤独さを表している。

・全く自分の都合で。丑への気遣いではない。

「しっかりつかまっているんだぞ。いいか、いいか。」

先生は念をおして手をはなした。

・もはや、縄一本しか頼るものはない。

つるべは、宙に浮いて、それから、そろそろ井戸の中におりはじめた。

丑の、頭がかくれて、すがっている手頸がかくれて、とうとう麻なわだけになった。

・丑の心の震え、怯え、を象徴している。

麻なわが、こまかくふるえながらさがって行った。

丑は、二間おり、三間おりて行った。

あたりは、へんにうすらつめたくて、シーンとしていた。

先生だの、みんなの声が、遠いところからひびいてくるようだった。

丑は、だんだん大たんになってきた。

・自分一人の世界になって、返って落ち着いてきた。

・二間おり、三間降りても何もかわらない。

・頼る者は今自分自身しかないと覚悟した。

上を見上げると、ポッカリと、おてんとうさまのように円い、明るい空が見えて、

・上からのぞきこんでいた時に見えた不気味な水面とちがって、明るい地上世界が見えている。安心感がふくらむ。

そこから、三つ四つ、小さい顔がのぞいていた。

自分を圧迫していた彼等が小さく見える。

つるべは、まだ水へ届かなかった。ゆるゆると下へおりて行った。

・もうおそれは消え、ゆるゆると降りていくことを楽しみはじめている。

そして、上の円い空は、ずんずんちいさくなって行った。

丑は、なんだか、じぶんが下へおりるのではなくて、高いところへあがって行くのだというような気がしてきた。

・ずんずん小さくなっていく地上の彼等を見下ろしているような気分。

みんなの手の届かない所へ自分だけが突き進んでいる。快感。

「やつら、くやしけら、きて見ろ！いばったって、ここまでこられめが！やあい！」

・今まで丑は、「やつら」という呼び方をしたことはなかった。丑が変わりつつある。

丑は、そう心の中でどなっていた。

今まで意識の底に沈んでいた本来の丑が急速に目覚め始めている。

ピシャリと、つるべが水にふれた。

底についたのだ。

丑は、ハッとして、

・「ピシャリ」という音で我に返る。そして、その時心の中にふくれ上がってきている本来の自分自身をはっきり自覚する。

「よおし！」

と大声でどなった。

・自己変革の宣言の叫びである。丑は、今初めて対等の立場で彼等に向かっている。

声は、うつろの壁にひびいて、ゆかいそうに上へ消えて行った。

・うつろ……中身がないようす。からっぽ。実は何もないただのかべにすぎなかった。

今まで、みんなをおそれさせていた井戸の壁。

・響きそのものおもしろさだけではなく、今目覚めた新たな自分を繰り返し確認しているような愉快さ。

・井戸を征服した快感も含んでいる。

手をのばして、落ちているものを引きよせて見ると、それは、つぶれた古いフットボールの皮だった。

「なんだ！何がおっこちてたんだ！」

上からだれかきいた。

「フン。」

丑は鼻の先で笑って、口に出してつぶやいた。

・軽蔑の笑い。たかがつぶれた古いフットボールの皮に大騒ぎしている彼等。

「知りたけら、自分でおりて来て見っといいや！」

・自分ではこわくてとても降りられないやつらなんだ。

つづいて、先生の声が聞こえた。

「丑松！なんだった……」

・不安。恐れ。

「死んだねこっ子でやんす！」

丑は、いじ悪くこういった。

・つまらないものにおびえている先生の実体が見える。よけいからかいたくなる。

「そりゃいかん！早く、つるべっ中さ入れて引きあげろ。」

「きたねえから、おら、やだなあ！」

丑は、さもほんとらしく、こういって手をひっこませた。

「せっかくおりたんじゃないか。がまんして、持ってこう！いいか！」

先生が、たのむようにまたいった。

・もはや、完全に立場が逆になっている。

「猫っ子だと！」

「どうして、また落っこったんべ。」

「きっと、高等科の生徒が、ぶちこんだんかもしんねな！」

「くさってんべな、きっと！」

井戸端で話す、そんな声がきれぎれに聞こえてきた。

丑は、ニヤニヤ笑って、フットボールの皮をきたなそうにつまみあげると、

・にやにや……内心悦にいったり、さまざまの思い入れがあったりして笑いを浮かべるようす。

様々な憶測をして怯えている彼等が馬鹿らしく見える。

・きたないフットボールの皮は、地上の彼等を象徴している。

それを足の下のつるべにぶちこんだ。

ぶちこむ……乱暴に勢いよく中に入れる。

とるに足りないやつらをぶちこむように。

つなは、またそろそろひき上げられた。

丑は、近づいてくる頭の上の円い光を見上げながら、口笛をふきふき上って行った。

・単に仕返しをしてやったというようなちっぽけな快感ではない。

今まで自分より遥かに強大に見えた人間が実は虚像におびえる弱い人間であることを見、今まで意識の底に沈んでいた自分自身の力に目覚めた喜びからくる快感である。